

世界トップレベルにおける低身長ライトバックプレーヤーの ディスタンスシュートプレーに関する事例研究

榎本 悠雅 (201911825、ハンドボールコーチング論研究室)

指導教員：曾田 宏、藤本 元、山田 永子

キーワード： シュートパターン、映像分析、生起率

【目的】

世界の男子ハンドボール界では、身長が高いバックプレーヤーだけでなく、身長が低いバックプレーヤーも活躍している。本研究では、世界トップレベルの低身長ライトバックプレーヤーのディスタンスシュートプレーに関する事例研究を行い、その特徴を明らかにすること、それらと研究者本人の特徴を比較検討し、今後本研究者が世界と戦う上で目指すべきディスタンスシュートプレーについて検討できる基礎資料を得ることを目的とする。

【方法】

対象者は、A. Dujshebaev (スペイン代表, 187cm), O. Magnusson (アイスランド代表, 186cm), K. Smits (オランダ代表, 185cm) とハンガリー1部リーグでプレーする本研究者、Enomoto (175cm) である。この4名はいずれも左利きライトバックプレーヤーである。

ヨーロッパチャンピオンズリーグ、ヨーロピアンリーグ、ヨーロッパ選手権、ハンガリー1部リーグの公式戦 (72試合) を分析対象試合とし、そこで打ちれた対象者の全ロング・ミドルシュート (277シーン) を標本とした。

ボール保持局面における分析項目は、ドリブルの有無、フェイントの有無、歩数であった。シュート局面における分析項目は、種類、エリア、接触、リリース、タイミング、位置であった。

分析結果は、各個人について、プレー要素ごとに、項目間の生起率を比較した。統計的検定に関しては、有意水準を5%とし、カイ二乗検定を用いて比率の差を検定した。3つ以上の項目で有意差が認められた場合には、Ryanの方法により有意水準を調整して多重比較を行った。

【結果と考察】

(1) 対象者4名のいずれにおいても項目間の生起率に有意な差が認められたプレー要素を低身長の左利きライトバックプレーヤーの特徴と捉えると、それは、中央のエリアからのシュートが多く、利き手

側のエリアからのシュートが少ないこと（表1）、クリックシュートが多く、セーブしてのシュートが少ないとことであった。

(2) Enomotoの特徴は、他の世界トップレベルの選手と比べると、接触がない状態でのシュートが多いこと、シュートの位置はミドルシュートよりもロングシュートが多いことが明らかになった。また、ディスタンスシュートにおけるプレー要素の偏りを見ると、Enomotoは9項目中、歩数を除く8項目においていずれかのプレー項目が多いあるいは少ないという特徴が見られた。一方、プレー要素の偏りはDujshebaevとMagnussonは4項目、Smitsは6項目であった。このことは、Enomotoは世界トップレベルの左利きライトバックプレーヤーと比較して、シュートプレーパターンが限定されていることを示している。

【実践現場への提言】

Enomotoの国際競技力を高めるための提言としてシュートプレーバリエーションを増やすことが挙げられる。具体的には、ドリブルやフェイントを用いてからのシュートを増やすこと、ジャンプシュートだけではなく、スタンディングシュート、ステップシュートなどを増やすこと、シュートの種類を増やすことが挙げられる。

表1 シュートエリア

	Dujshe. (n=79)	Magnus. (n=68)	Smit (n=57)	Enomoto (n=73)
非利手側	30.4 ^a	32.4 ^a	29.8 ^a	37.0 ^a
中央	62.0 ^b	66.1 ^b	63.2 ^b	58.9 ^b
利手側	7.6 ^c	1.5 ^c	7.0 ^c	4.1 ^c
	b>c	a, b>c	b>c	a, b>c

数値は%を示す。>:p<0.05